
終末のシミュラクル・パペット

夏季津 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末のシミュラクル・パペット

【Nコード】

N4787Y

【作者名】

夏季津 杏

【あらすじ】

近未来の関東地区。極限まで進んだ環境汚染により各地へと排気されていった光化学粒子を電離還元すべく科学者たちは秘密裏にグラウンド・ゼロを計画した。

万が一に備え各地に防空シティーを築き、特権階級たちだけを避難させてから打ち上げた「電離還元型浄化砲」により、光化学粒子を電離還元によって分解するはずが光化学粒子を感染型に凶悪化する結果に。

感染型光化学粒子は人間の遺伝子レベルで変異を与え、人類は劣

性因子ゲノムと、優性因子ゲノムを体内に持つ二つの種族に別れてしまった。

終末に向かう世界で二次的な人形のように自分の人生を操られ続けた少女が、その因縁を断ち切ろうと苦しみながら父親が計画する世界の改編原初計画と立ち向かう。メカありエロ要素は少なめのライトな近未来SF冒険物語！

プロローグ（前書き）

以前に書き上げたライトな近未来SF冒険物語です。某先行作品と世界観が似ているせいか、とある新人賞で落選してしまった作品を全面的に改稿した物になります。他のWeb小説と比べると行間が狭く、読みにくい面がありますが、一つのスタイルなのでご理解下さい。

また少しでも需要がある限り、ちよつとずつ連載の形でアップしていきたいと思いますので、興味があれば一読してみてください。

感想などもらえれば、なお嬉しいです。

プロローグ

プロローグ——天上の牢獄で

自分の知らないもう一つの世界が存在するのを少女が初めて知ったのは、母が定期的に持ってきてくれる旧時代の書物からだった。幼い頃からずっとコントロールタワーの一室に幽閉されてきた少女にとって、旧時代の書物は外界を知る唯一の術だったのだ。自分たちが暮らす防空シティーの遥か彼方には外界と呼ばれる未知の領域が広がっているらしい。少女は興奮を抑えきれなかった。

まだ幼い頃には夢中になり外界について、食事時にやって来る母に尋ねた。

——ねえ、下界ってどんなところなの？

——とても寂しい所よ

そのたびに何故か決まって母親は冴えない顔を浮かべる。外界を詳しく知りたがる少女に困っているようだった。少女がせっつく度に母は外界についてあまり語らなくなる。

それでも少女の知的好奇心は膨らむ一方で、特に外界でしか滅多に拝めないという本物の太陽に対する憧れは強くなっていった。

成長していくにつれ少女は母に迷惑をかけないように、一人で外界の情報を書物の記述から探すようになった。自分の世界が広がっていく感覚だった。

けれども少女が日常的に接する環境は限りなく限定されていた。閉鎖的な八畳の冷たい一室。それが少女の全てだった。窓はなく床から天上、全てが石材に似せた合成樹脂でガードされた無機質な空間にはカプセル型安眠装置にデスクとチェアが一对あるのみだ。

デスクに鎮座した小型のラップトップは防空シティーのネットワークにオンラインされているが、得られる情報は少女専用に厳選され何重にもフィルターがかけられている。だから少女には母が持ち込んでくれる旧時代の書物しかなかった。

ある歳の誕生日。少女は母に頼みこんでアルミ素材の板をいくつももらう。防空シティーにおいてあらゆる資源は貴重だった。少女は板を組み合わせて本棚という物を自作してみた。旧時代には情報を端末に保存する習慣が定着するまで、書物を本棚に収納していたらしい。お気に入りの文献が並んでいるのを眺めると幸せな気分浸れた。

こうして重大な問題から少女は目を逸らし続ける。なぜ自分たちは防空シティーの中に閉じこもっているのか？ 外界で何が起こったのか？ 嫌な想像をできるだけ排除しようとしても、考えずにはいられない。自分がこんな狭い空間にいつまでも押し込められている理由。毎日与えられる情報工学系の課題と意味不明な設計の仕事。定期的にしか顔を見せない母。そして姿さえ見せない父――

コントローラタワーの職員たちが自分を何かのエンジニアに仕立て上げようとしているのではと少女は邪推したことも幾度かあった。それなのに知識を植え付けられると脳が苦も無く吸収し学習意欲が沸き立つ自分がいる。少女はそんな自我を一番不気味に感じていた。だが都合が悪い状況を直視せず、逃げ惑う毎日に終止符が打たれる。

少女が十五歳を迎えてから母の来訪が極端に減ったのだ。防空シティーで最も天に近いコントローラタワーからでも、外観からは時間の移ろいが判別つきにくい。けれどあれは夕食時だったと少女は鮮明に記憶している。部屋に現れた母は青ざめた表情を浮かべていた。

少女は心配になって駆け寄る。

――お母さん、大丈夫？

――ええ、ちょっと疲れただけよ

少女が事情を尋ねても返事もろくにせず、天井の角に設置された監視システムから背を向けて警戒心を滲ませる母。監視カメラの死角になる位置を割り出そうとしていた。

そして電子化が進展した現在において滅多に使用されなくなったメモ用紙とインクペンを懐から取り出し、文字を書き連ねる。原始的手段でどうにかコミュニケーションを取ろうと試みたのだ。記録媒体に残らないように。少女は母がこっそり差し出すメモ用紙を覗き込んだ。それを受けて少女もメモ用紙に質問を書いて返していた。

母と娘の密やかな筆談の中で、少女は衝撃の事実を知らされる。少女が近い将来に死ぬ運命にあること。現状では母として何もしてあげられないところ。混乱する少女。母は少女にとって一つだけ残されているらしい生き延びる術を小さな紙切れで教えていく。一文ずつ少女の頭へ刻み込むように。とても正気とは思えない発案に少女は腰が引けた。それでも母は必死の形相で繰り返す。涙を瞳に浮かべながら。

——ごめんね。私たちのせいであなただは……生きて、必ず生きるのよ。外の世界で

少女は母の願いを果たす決意を固めるしかなかった。母が悲しみを堪えながら去った翌朝、父親だと名乗る男が代わりに部屋にやって来たからだ。残酷な一言だけを携えて。

『君のお母さんは昨晚未明に息を引き取った。これからは私に従ってもらう』

現れたのは白い白衣を纏った細身のシルエットの男。どこか虚ろな仕草。銀縁メガネのレンズ越しから伶俐な瞳を向けられて、少女は根拠もなしに確信する。この男が母を殺したのだと。

『君は私のキーになってもらう。下準備は整った！』

父親と名乗る男が狂喜の笑みを浮かべて差し出す手を少女は振り払う。完全なる拒絶。

そしてただ少女は母が紙に記した内容を反芻しながらただ自分が

外界に出る時を待ち続ける。

母が訪れなくなったこの牢獄で――

一章 雛鳥、外界へ舞い降りて その1（前書き）

連載している「終末のシミュラクル・パペット」の一章の一部を続けてアップしたいと思います。

一章は何分割してこれからもアップしていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

一章 雛鳥、外界へ舞い降りて その1

一章 雛鳥、外界に舞い降りて

生涯初めて見上げた擬似的な空はどこまでも澄み切っていた。人工天体システムが投影する陽光が辺り一面に拡散して、明るさに慣れないタカミヤマヒルはつぶらな瞳を細める。

辺りの空間に交差する動く歩道の一つへマヒルは慎重に足をのせる。冷気を孕んだ突風が、肩で切りそろえた黒髪を弄んだ。初冬の空気感を人工天体システムは忠実に再現していた。

マヒルが自慢の髪を手で押さえつけるように頬に触れると、手袋越しからも痺れるような鋭い感覚が伝わる。全身をグレーの保温スーツで固めてはいるが、首から上はどうしても外気に肌が露出してしまふからだ。マヒルは寒さに立ち向かうように身体を反らした。胸部のふくらみはいくらか乏しいが、体のラインを強調する保温スーツ姿は艶めかしくはある。

マヒルは短い人生の大部分を過ごしてきたコントロールタワーから、独立行政機関である研究所——統合参謀ラボへ通じているらしい電動式の「動く歩道」を渡っていた。

ただ今はマヒルに対する警備上の都合から動力自体は停止している。おおよそコントロールタワー内部に眠るマザーボードを直接操作したのだろう。

女一人に大げさなことだ。

マヒルは声にならない鬱情を呟くと、前後を二名ずつで挟むように監視する屈強な護衛官チーム内の現場責任者が聞きつけた。卑屈さが滲み出た面構え。それでも主任護衛官の立場にあるのをマヒルは頭の片隅で思い起こした。

「今、許可なしに何かしゃべったか？ 一等試験体？」

「人工天体システムの監視さえあれば、あんたたちは用済みなんじゃないと独り言を溢したただだから気にしないで」

「どれだけ技術が進歩しようと人間は形式に拘るのさ。こうして両手の自由がきかないお前を眺めるのも気分がいい」

主任護衛官がマヒルの両手首に課せられた電子式の拘束具を鳴らしてみせた。いい知れない嫌悪感がマヒルを襲う。こういう男を旧時代には何と呼んだか。マヒルはこれまで読み漁った書物から記憶を探る。ペド……いやサド野郎、だったか。

「おら、呆けてないで歩け、一等試験体！」

高電圧のスタンガンが仕込まれた警備棒で背中をど突かれ、マヒルは己の肉体を精一杯支えるように足を踏み出す。自分が設計した備品で指図される始末。

やや鬱気味で「動く歩道」をマヒルは予定通りゆっくりと渡る。

筋力をつけようと、最近トレーニングを密かに開始したが長年の温室暮らしが祟ってかやたらと息が上がった。

己の情けなさを押し殺しながらマヒルはわざと注意を真下へ向けた。護衛官たちの注意もマヒルから逸れる。

高層のコントロールタワーから伸びている「動く歩道」からは、マヒルたちが暮らす人口の生活圏―防空シティーの外周まで見通せた。未知なる外界とシティーを隔てるドーム状の分厚い金属防壁。そうして視線を足元まで戻せば、防空シティー内の統治機構が密集するセントラル区域が直近に広がっていた。

景色に見とれている振りをして予め舌にくるむように隠してあった、半導体のマイクロチップをマヒルは素早く手に握りしめる。

「早く前へ進め！ 何度言ったら分かるんだ！」

主任護衛官から再度、警備棒で背中を催促される。鈍い痛み。わざと電圧を入力したのは明白だった。覚悟していたとはいえ、これ以上の負荷が加わるとマヒルはたやすく意識を失うだろう。マヒルは自分がここの市民ではなく囚人なのだと改めて実感した。

例えばこの両手の自由を奪う鉄製の拘束具。旧時代にも手錠と呼

ばれ長らく存在してきたのをマヒルは知っている。変態主任護衛官のご託通り、どれだけテクノロジーが発展しようともこうした代物だけは形を変えない現象にマヒルは皮肉めいた感情を覚えた。

動きを何重にも制圧された状況下にあつて、心が折れそうになるのをマヒルは懸命に堪えようと自らを鼓舞する。これから自分は何動しなければならぬのだ。ちょっとした判断の遅れや、気の迷いも許されない。

——カシャン、カシャン、カシャン……

両手の拘束具に付いている鎖を鳴らしながら、マヒルは動く歩道の中腹まで差し掛かる。コントロールタワーを頂点とするなだらかな傾斜を下った先には、マヒルが移送される統合参謀ラボの円筒形をした白い建物が眼前に浮かんでくる。母の情報通りだ。

渡り切ればもうチャンスはない。

まずマヒルは拘束具の側面にある電子制御リーダーの基盤を確認した。さらに前方の護衛官が腰にぶら提げている電子キーの束をじっと観察。自慢の動体視力でシリンドラーの形状を一つ一つ見極めるとマヒルは不敵に笑った。これまた母の恩恵だ。

マヒルは三文芝居のごとく必要以上に甲高い呻き声を出しながら、腹部を手で押さえてその場に座り込んだ。主任護衛官が慌てて近づく。監視対象が異常を起こして、責任が回ってくるのを恐れからだろう。

「おい、しっかりしろ。どうした？」

「……目眩が酷くて立ち上がれません」

「これだから箱入り娘は困るんだよ。それにしても腹が痛くなる目眩なんて、聞いたこと……」

予想通り、悪態をつきながら前方の護衛官が自分を背負う動作をみせる。無防備な背中。マヒルはその間隙を縫い、手に握り込んだ半導体のマイクロチップを拘束具の電子制御リーダーにかざす。拘束具はあっさりと外れる。この間、実にコンマ数秒。

マヒルは解放された両腕を名一杯伸ばして、ようやく振り向いた

主任護衛官の腰にぶらさがっているスタンガン式の警棒をくすねた。
「このガキっ！ どうやって！」

他三名の護衛官は責任者を援護するような陣形で警備棒を抜いてマヒルと退治する。マヒルはその圧力に臆しながらも声を張った。
「それ以上こっちへこないで！」

自分で設計した警備棒を頼りに及び腰になりつつ、マヒルは護衛官たちから距離を取る。感電する可能性から向こうも迂闊に近づけまいと踏んでいたマヒルの思惑は崩れ去った。主任護衛官が嘲笑うように口元を歪めたのだ。

「何が可笑しいのよ！ 感電させるわよ、このサディスト！」

主任護衛官は落ち着いた動作で懷から小銃を取り出した。

「何も警備棒だけが護衛道具じゃないさ。癪癪を起こした対象にはこつして麻酔銃を使用するように指示を受けている。自分の足じゃなく引きずられてみるか？」

銃口を向けられマヒルは硬直した。殺意に近いプレッシャー。いや、落ち着け。母は敵が麻酔銃を携帯している可能性も見逃してはいなかった。ただ少し痛い思いをする道へと作戦を切り替えるだけだ。

マヒルは保温スーツの襟から伸びたヒモを引いた。緊急時用の自動膨張をマヒルが予め手動に切り替えておいた結果だった。旧時代の車両に普及していたエアバッグのようにスーツを通して身体に空気の膜が覆う。これも母から伝授された苦肉の策。

ただあくまで交通事故専用。これから先どうなるのかマヒルには検討もつかない。

それでもやるしかなかった。

「そんな小細工何の役に立つ。大人しくその場を動くな」

主任護衛官を筆頭に全員の手がマヒルに伸びる。マヒルは躊躇無く「動く歩道」の安全シールドによじ登った。護衛官たちが焦り出す。

「こいつ、まさか！？」

目指すは数十メートル真下の屋上。ココ周辺に密集する建造物の図面は、飽きるほど頭にたたき込んである。

マヒルは全身の力を抜いて偽造された空中へダイブした。不思議と恐れはない。母が側にいてくれている気がするから――

外界と遮断されているこの防空シティーであつてもちゃんと風の音が耳に鳴る。頭上からは護衛官たちの野太い声。全てがスローモーションで流れる中、マヒルは衝撃を最小限に抑えるために膝を両腕で抱え首を埋めた。体育座りの要領だ。

コンクリートが迫る。死のイメージ。頭に入り込んでくる悪夢を振り払う。

マヒルは歯を食いしばりながら、ダメージの少ない体の真横から重力を受け止めた。鋭いインパクトに呼吸が止まる。背骨が真つ二つに折れた感覚に取り憑かれながら、マヒルは損傷具合を確かめるように体を起こした。視界がやたらと揺れる。

地面に接した方の腕以外は幸いな事に目立った異常はない。空気がすっかり抜けた保温スーツに感謝しながらマヒルは騒がしい頭上を仰ぐ。護衛官たちが仕切りに怒声を散らしてこちらを指さしていた。

『全警備員に告ぐ。一等試験体がルートの真下に飛び降りて脱走を図った。繰り返す一等試験体がルートを外れて脱走を――』

ついにコントロールタワーからサイレンが鳴り響いた。これでセントラル区域は数十分後に封鎖されてしまうだろう。ここで捕縛されたら長年の下準備が無に帰してしまう。

マヒルは身を奮い立たせ、今いる建物の屋上から地上への脱出ルートを探し回る。脳内にインプットしてある図面と照らし合わせて、屋外スペースの周囲を歩けば案の定発見した。避難用の非常階段が螺旋状に建物の側面へ沿って地上へ伸びている。

さながら天使の梯子を連想させる階段をマヒルは息つく暇もなく駆け下りる。ずっと監禁部屋にいたためか地面が無性に恋しかった。呼吸も荒くセントラル区域のだ真ん中へ降り立つと、天上での

騒動が嘘のように大勢が石畳の街道を行き交っていた。平穩そのもの。人工天体システムが調整する気候の影響を間近で受けていないのかほとんどの人が普段着だ。保温スーツで体のラインを無駄に強調している自分が急に恥ずかしくなってマヒルは頬を赤らめる。こちらを訝しがる視線も四方から感じる。

マヒルは好奇の目を避けるように旧時代の遺産として命名されらしいセントラル区域の大動脈——「トウメイ・ストリート」を南へ下る。この先に防空シティー内を縦断するリニアの発着拠点「エビナ・ステーション」があるはずだ。この奇妙な名も旧時代の名残である事実をマヒルは書物で知っていた。

マヒルは余計な思考を振り払い小走りにギアを切り替える。目指すは広大な防空シティーの東端。母が指し示してくれた希望の場所。何が待ち受けているかは知らないが、目指すにはまずリニアに乗り込む必要がある。

統治機関が密集するセントラル区域の堅牢な建物沿いの大通り。溢れる人垣を掻き分けながらマヒルはピッチを上げた。息が荒い。小走りがこんなに負担になるとは牢獄暮らしのマヒルには想定外だった。

敵の追尾を恐れ時折、後方を振り返るのに神経を使つたため疲労はさらに蓄積する。

雑踏の流れに従いながら大通りを下りきると広場に出た。その終着点に全面レンガで築かれたホール状の建築物が姿を現す。母が紙に書いた図とそっくりな形状。

とりあえず探していたエビナ・ステーションに違いない。マヒルはようやく安堵できた。ここから発進する磁気浮上式リニアは統治機関が集うセントラル区域と、一般市民が生活する外周を結ぶ防空シティー最大の交通機関だ。

乗り込むだけで目的地である防空シティーの東端まで確実に運んでくれる。

マヒルが思わず歩幅を緩めたその瞬間——

『今すぐ止まれ！ そうすれば危害は加えない』

後方から拡声器を通した野太い声が耳をつんざくように響く。あの加虐性欲野郎だ。振り返れば部下の護衛官たちがご丁寧に数十名集結していた。手にはゴツイ銃器。設計には携わっていないがおそらくマヒルを無力化するために用意されたものだろう。それでもマヒルは止まれなかった。諦めてしまえば母の願いを無駄にしてしまうからだ。

巻き添えを食らいたくい市民たちが四方に散っていく中、マヒルは後ろからの制止を無視して再び走り出す。「エビナ・ステーション」が目前に迫る。

だがあと一息でマヒルは足を止めるしかなかった。前方にも見慣れない戦闘服を着た男たちが配備されていたからだ。完全に挟み撃ちにあったマヒルは唇を噛む。拡声器の音が追隨する。

『前にいるのは治安部隊だ。逃げられはしない。大人しく投降しろ、一等試験体。いやモルモットと呼んだ方がいいかな？』

前後から男たちがにじり寄る。マヒルは一か八かの賭けに出た。後戻りはできない以上、前進しか道は残されていない。体制を低くして包囲網を突破しにかかる。だが一人の治安部隊にマヒルの細い腰を両腕で抱えられた。捕まえられて動けないマヒルは決死で暴れるも、成人男性の力には遠く及ばない。

それでもマヒルは怯まなかった。動く首を伸ばして男の手首に歯を思い切り突き立てた。

「ぐあつ！ こいつ正気じゃない。噛み付きやがった！」

喘ぐ治安部隊の男は思わず手を引く。

「モルモットにも前歯ぐらいあるわよ！」

嫌みを一つ叫び、解放されたマヒルは息つく間もなく「エビナ・ステーション」へ急ぐ。

先ほどの地点でマヒルを捕える予定だったためか、ステーション内には新たな人員は配置されていなかった。その隙を突くように、マヒルは天蓋がステンドグラスで覆われたホームを進んで行く。

待合う一般市民を押しつけながら、ステーション内の地理に詳しくそんな人物を探す。すると旧時代では駅員と呼ばれていたやたら目立つ制服を着込んだ中年男性がいた。さすがにこの人まで自分を捜索してはいないだろう。

「すいません。防空シティーの東端に行きたいのですが、どのリニアに乗ればいいでしょうか？母親とはぐれてしまったんです」

半分本当のような嘘の作り話をでっち上げる。中年駅員はしわが目立つ顔をさらに歪めてマヒルの場違いな保温スーツにやはり訝しげな態度を覗かせた。好きでこんなイヤラシイ格好しているんじゃないわよ！と胸の内で感情を爆発させながらも、マヒルは漆黒の瞳を潤ませながら駅員の男の顔を見上げる。偽りの涙は女の武器だと旧時代の物語で散見した結果、思いついた処世術だ。

「東居住区行きなら三番線からもう間もなく出るよ。途中下車さえしなければ東端まで運んで行ってくれるだろう、お嬢ちゃん」

「分かりました。あと……私、実は手持ちのお金がないんです。それでも乗車できますか？」

恥ずかしげなマヒルに驚きの表情を浮かべる中年駅員。

「お金がないって、現物通貨だけじゃなくて、電子マネーもかい？今までコントロールタワーに閉じ込められてきたマヒルは当然、防空シティーで流通している通貨についての知識はいつさいなかった。ただ旧時代の書物から何をするにもお金が必要だという世知辛い事実だけは理解していたのだ。マヒルは曖昧に返事する。

「そうなんです……」

「これは困ったな。まあ、座席車両じゃなく貨物車両ならただで乗せてあげること——」

「本当ですか？ぜひお願いします！」

嬉しそくに顔を綻ばせるマヒルに、悪い気はしないのか中年駅員は得意げになる。

「しょうがないお嬢ちゃんだな……じゃあ、現場の人間に話をつけておくよ。後列に連結された車両ならどれでもいいから乗り込んで

くれ。座席がないから窮屈だけだね。それにしても君みたいな子供が東端なんて辺鄙な場所に行きたがるなんて、何か事情があるのかい？」

「……はい。はぐれた母が待っているんです。どうもありがとうございます」
もう十六歳になる若き乙女なのにお嬢ちゃんと呼ばれてしまい、言い知れない屈辱感を味わったマヒルだったが、愛想よく手を振って中年駅員と別れた。自己利益のためだけに築かれた防空シティーにも親切な人間はいるんだと分かると少しばかり気持ちが悪く。

『あの中年男性、マヒルを舐め回すように見ていた。ロリコン疑惑アリ』

マヒルがほっと一息ついた所で保温スーツの懷から小さな機械体が頭部を覗かせた。

「ちよつと、勝手に出てきたら駄目だつて忠告したでしょ、イブ？」
イブと呼ばれた機械体は人間を模した愛らしい小さな体躯でマヒルの襟元に捕まっている。さながら旧時代に存在した着せ替え人形のような外見。顔の作りは非常に精巧で形の良い双眸には意志の光が宿っている。

旧時代から子供の遊び道具として対話用ミニドールが開発されてきた。役割を終えて廃棄されそうになっていたイブをマヒルの母が話し相手として幽閉部屋に持ってきたのだ。

以来、マヒルはこの機械体をメンテナンしながら孤独な日々を共に過ごしてきた。あくまで子供向けのおもちゃなので感情は乏しい。だけど相棒のような存在だ。

『もう、当面の危険は去ったから問題はないはず』

イブは悪びれることなくマヒルを見上げた。対話用ミニドールは長年愛用していると人格が持ち主に似てくるという言葉説があるが、マヒルは真っ向から否定したい気分だった。

「まだコントロールタワーの人間が迫ってくる可能性だつてあるんだから、ちゃんと大人しくしていて欲しいの。それに私はロリコンの標的対象になるような年齢じゃないんだから！　うら若き十六歳

よ」

『マヒルは思い切り童顔の部類に入る。体つきもセクシー系じゃない』

「どこでそんな言葉を覚えたのよ……」

文句を溢しながらもマヒルは自覚があった。幽閉されていた長い期間、旧時代の物語や文献などを読み漁っていたため、この対話用ドールと会話する内に自動学習機能が働いて覚えたのだろう。

マヒルは嘆息しながら、イブの小さな頭を再び保温スーツの懷に押し込んだ。

「とにかく今は静かにしていて、イブ」

「ちよつと、レディーに何するのよ!？」

胸の中で暴れるイブを押さえ込んでマヒルは教えられた通り三番線のプラットホームに向かうと、美しい流線型のリニアがすでにスタンバイしていた。後列の貨物車両にマヒルが無断で飛び乗る。先ほどの中年駅員がちゃんと話を通してくれたのか車掌と思しき人は咎めもしない。

貨物車両には中身が判然としないコンテナが物資として窮屈に積み込まれていた。マヒルはその隙間に申し訳ない感じで身を潜める。しばらくするとリニアが駆動音もなく静かに滑り出した。揺れは極端に制御されているが、駅員の指摘通り座席がまったくないため乗り心地は良くない。それでもマヒルは外の様子を見ようと、はしやぐように顔をあえて車窓に体を張り付かせる。

『ほら、まるで子供みたい』

「……うるさいわね」

いつの間にかまた懷から顔を出したイブがからかってくる。マヒルはそれ以上、相手にせず眼前を流れゆく風景を凝視する。

ところが期待していたような光景はお目にかかれない。人工物がひしめくセントラル区域を高速で抜けても、管理され手入れの行き届きた庭園がどこまでも連なっていくだけだ。旧時代の書物で読んだ列車から眺める田園風景とは程遠くどこか寂しげだった。

『マヒル、何か近づいてくる。すごい振動』

イブが警告を発する。人間と有意義なコミュニケーションを図るために設計されたイブの本体には発音を聞き間違えないよう、僅かな振動にも反応するセンサーが組み込まれている。

車窓から身を乗り出すように外を窺えば、リニアと並行して猛追してくる飛行体の影を発見した。

ここ数年、エンジンニアとして防空シティーに配備されている兵器の一部設計を担わされてきたマヒルには見覚えがある形状だった。確か追尾専用戦術輸送機のβタイプに似ている。恐らく自分が設計案を出したタイプの新型に違いない。自分が作った物が障害になるとは皮肉な状況だった。

こうなればいくら運転速度に定評になるリニアとはいえ、振り切るのは難しい。向こうは追跡に特化した構造になっており、変幻自在の加速度を備えている。だがマヒルには納得できない不可解なことがあった。セントラル区域のステーションから何本も出ているリニアからどうやって自分を探り当てたのか？ マヒルが真剣になって状況把握に頭を働かせていると、イブが繊細な指を空中に上げて叫ぶ。

『何か飛んでいる。嫌な音』

マヒルはイブが導く方向を見やる。昆虫型監視カメラだ。してやられた。最初に嗅がせた体臭を放つ人物を追跡して位置情報をリアルタイムで送信する極小偵察機だった。恐らくステーション前で包囲網を強引に抜けた際、誰かが放ったのだろう。

マヒルは自分の迂闊さを呪いつつ、空中に留まっている昆虫型監視カメラを素手で掴み上げ靴底で破壊する。こいつの弱点は鈍い動きと構造の脆さにある。だがもうマヒルの現在地は筒抜けに違いなかった。

『野蛮な行為。女の子のやることじゃない』

「仕方ないでしょう？ 手段を選んでいる暇はないわ！」

マヒルはリニアから途中下車しようか迷ったが、最終目的地まで

直行することを胸に決める。どうせ降りて敵陣に囲まれるならば、行けるところまで突き進んだ方がいい。

リニアが路線上の駅に停車して乗客を降ろすことが何度もあったが、追尾型戦術輸送機は不気味にも一定の距離を保ちながら跡をつけてくる。どうやら一般市民に危害を加える気は毛頭なく、マヒルだけを確実に捕えようとしているらしい。

膠着状態が続く内にリニアは最終目的地へ着いたようだ。終着を告げるアナウンスが荷台車両にも漏れ伝わる。

マヒルが勇気を出して最終地点である東端に下車すると、母から与えられた情報はここでもまさに正確だった。最終駅が建っている人工芝の小高い丘から見下ろせば、広大な湖面が静寂さを湛えながら広がっている。対岸は霞んで見通せないが、さらに先には防空シティーの終着点――外界からの空気を遮断する金属の壁が高くそびえ立つのが分かる。

壁面は内側に歪曲するように遙か天まで届くかのように連なっていた。詰まるところ防空シティーは一つの巨大なドーム型シェルターなのだ。

それでも上空は明るく晴れ渡っている。シティー内の領域全体の環境をコントロールタワーが所蔵する人工天体システムが一手に制御しているからだ。太陽に見える光源も人工天体システムがドーム状の擬似的な空へ投影しているに過ぎない。

そうやってこの堅く閉ざされた空間でかつて特権階級だった人間たちが何とか生活している。

マヒルは背中を押されるように母との約束の地――防空シティーの東端にある湖へと足を伸ばす。

ここに何かあるのかまでは教えてくれなかった。ただ母は震える指先でマヒルとの筆談の最後にこう記し残したのだ。

――そこに行けばあなたの大好きな外界へ出られるから、必ず生き延びるのよ

母の言霊を胸に抱えながらマヒルが湖へ近づく。途端にイブが警

告を鳴らした。

『マヒル、何か飛んでくる』

直後、肉眼では判別できないほど鋭い軌跡が肩越しから人工芝を深く抉った。マヒルは反射的に上空を仰ぐ。追尾型戦術輸送機の影。辺りに立ち込める煙を吸い込んだマヒルは悟る。催涙弾だ。とめどなく流れる涙と鼻水、そして激しい嘔吐に襲われその場から動けない。

さらに降りしきる催涙弾の雨。ついにマヒルは人工芝へ突っ伏した。

地面に落ちないようにイブをかばいながら、どうにか氣力を振り絞り首だけで後ろを視認する。

着陸を果たした追尾型戦術輸送機から護衛官たちが、訓練された無駄のない動作でマヒルへと迫ってくる。視界がぼやけ始めるマヒルの耳元で、主任護衛官の地位にある加虐性欲野郎の汚らしい声が妙にクリアに響く。

「……まったく手を焼かせやがって。こちらチームデルタ。一等実験体を捕獲」

マヒルは主任護衛官になされるがまま、腕を引かれ肩に担がれそうになる。連れ戻されるよりも母の願いを最後まで叶えてあげられないのが悔しく、マヒルはさらにお嗚咽を漏らす。

催涙弾からくる涙だとは思いたくなかった。マヒルは最後の抵抗のように力を込めて叫ぶ。

「誰かお願いだから助けて！」

懐のイブを掌で護るようにマヒルが祈ったその瞬間――

心からの声に反応するように湖から何かが飛び出す。そうしてマヒルを回収しようとする主任護衛官に激突してその身柄を吹っ飛ばした。

途端に自由になるマヒル。かなりの衝撃に投げ出されたマヒルは意識を何とか保つ。そして状況を確かめれば、球状の機械体がマヒルを守るように立ちあがっていた。

数人搭乗できるほどの大きさ。滑らかで光沢のあるボディ。一体、この機械体は？

マヒルが混乱すると同じく現場責任者が戦闘不能になるという急激な戦況の悪化に、部下の護衛官たちは慌てて追尾型戦術輸送機の陰に隠れるしかない。

「……一体、どうなっているの？」

茫然と独り言のようにマヒルが呟くと、驚くことに球状の機械体から返答があった。ざらついた合成音が耳元に響く。

『手荒でしたが妨害者を排除させていただきました、タカミヤマヒルさん。あなたの声紋を感知すると私が起動するように予めプログラミングされていましたから』

「あなた私を知っているの？」

『はい。私はあなたの母親にあたるタカミヤヒロ主任研究員によって設計された緊急脱出用飛行装置――通称、小型シュートボックスです。形状は特殊ですが、機能は他の飛行体と何ら変わりません』
『あなたしゃべれるの？ でもイブとは違う……まるで感情があるみたい』

思わず溢したマヒルの独り言にも小型シュートボックスは応答する。

『こうして会話が成立するのはあらゆる既知言語を処理、推論、適用を担うエキスパートシステムを基盤とした人工知能をヒロ主任研究員が私に組み込んだからです』

人工知能。略してAIと呼ばれたテクノロジーは旧時代から研究が盛んになされたという記述をマヒルは何かの文献で目にしたことがある。イブの存在も感情を有する人工知能を開発する過程の一つで派生したものだ。だが現在、この防空シティーでは廃れてしまっている。機械に人工知能を持たせて感情を植え付けても逆に能率が落ちるだけで意味がないからだ。

けれど母があえてこれを用意していたということは――
「もしかして本当にお母さんは私を外界へ？」

小型シールドボックスは赤く光る二つの感知センサーをマヒルに定める。何だが本物の瞳に思えてマヒルは親しみを覚えた。

『ご推察通りです、マヒルさん。私はあなたを外界までお送り届けるために設計されました。敵が持ち直す前に早く中へ。ゲートを開けます』

その一言でようやくマヒルは護衛官たちが、怯えながらもこちらに対し発砲の構えをみせているのに気がつく。マヒルは指示に従い急いで小型シールドボックスが解放した搭乗口を潜る。

再び自動でゲートが閉じると完全にマヒルは外と分断された。同時に照明も灯り、薄暗かった内部の構造がはっきりと浮び上る。コクピットと瓜二つで、狭いが装備はしっかりしている。

マヒルが持つ工学系統の知識から判別できるのは、中央に固定された操縦席、そこから手で操れるようパネルとして埋め込まれている各種センサー、無線、位置情報を示すビーコンぐらいか。

そして壁面にはモニターがあり、視覚センサーから外部の映像が直にはつきりと見ることができる。今まさに護衛官たちがついに実弾を使いこの機体に向かって一斉に乱れ撃ちした。

「早く移動しないと、危険よ！」

マヒルが思わず悲鳴に近い声を発しても、小型シールドボックスのAIは冷静だった。

『あの程度の貫通力ならば心配いりません。私の装甲は万全です』

確かに次々とこちらへ着弾しても微かな振動が起きるだけで、内部にはまったく影響がない。

『それよりも早く操縦席に乗って身体を固定してください。すぐに発進します』

マヒルは慌てて操縦席に腰かけると、拘束パッチをしつかりと留め具に取りつける。

「でも、私はつきりいつてこういう飛行体の操縦経験ないんだけど……」

『マヒルは設計するのは得意でも、操縦オンチ』

いつの間にかまた保温スーツの懷から這い出てきたイブがチクリと痛いところを突く。

「いつも一言多いのよ、あなたは！ まったく……私が手動でどうにか動かさなきゃいけないんだから、少し黙っていて」

『安心してください。ヒイロ主任研究員によってすでにオートパイロットモードに設定されています。外界への着陸座標も全て決定済みです。それでは浮上開始まで残り数秒——』

「さすが母さんね。私が操縦できないのを見越していたんだ……」
すると重力から解放され、ゆっくりと機体が持ち上がる。そして前傾体制で発射。モニター越しに護衛官たちが退避しているのが映る。

ほっと一息つく間もなく今度は全身に急激なGがかかり、マヒルは息を吐き出すのも困難になった。モニターでは防空シティーの上空を突き進んでいるようだが、自分たちが一体どこに向かっているのか分からない。マヒルは苦しい体勢のままどうにか声を絞り出しAIに尋ねる。

「……どこに行こうとしているの？ 防空シティーは外界と遮断するために築かれた言わば要塞のような空間よ。どこへ飛んだって出入り口なんか……」

『確かに防空シティーは外界から進入する感染型光化学粒子阻む目的で、当時の人間たちが英知を注ぎ込んで建造された閉鎖都市です。ですが外界とのルートを完全に断ってしまうと今度は都市機能がマヒするのです』

「どういうこと？」

『例えば都市から出た不要なゴミ、つまりは廃棄物をどう処理するかなどの問題です。都市内の領域に埋め立てるのには限界があると判断され——』

「もしかして外界へ捨てているの？」

小型シュートボックスの説明を遮ってマヒルが声を荒げた。今までは狭い世界に押し込められて防空シティーの現状さえ知らなかつ

た。いや知ろうとしなかったのだ。外界という未知の世界にただ憧れて、両者の関係など考えもしなかった。もし小型シュートボックスのAIが説明通り防空シティーの人間たちが廃棄物だけを外界へ放り出しているのだとしたら――

「……身勝手ね、私たち優性因子ゲノムは」

『あなたの母親であるヒイロ主任研究員も同じ感情を共有していました。彼女は人間が二つに分裂してしまった現状を憂いて、この放射台建設の見直しを求めたのです』

機体内のモニターに防空シティーの分厚い壁面が迫ってくる。小型シュートボックスの機体は高度を極力下げて壁面に接近していた。この広大な金属製のフィルターで外界からの感染型光化学粒子をシャットアウトしているのだ。

このままでは激突してしまうとマヒルが身をすくめた時、よく観察すると壁面の一部が空洞化しているのを発見した。まるで巨大生物の口蓋のようだ。

「あれは、何？」

マヒルの呟きに小型シュートボックスのAIが応じる。

『防空シティーのさらに東――湖の対岸に位置する放射台への入り口です。ヒイロ研究主任との会話ログによると、あの人工湖はこの存在をカモフラージュするために作られました。このまま中へ進入して外界へ脱出します』

宣言通り機体が壁面の横穴に吸い込まれると、モニターが一瞬だけ暗転した。だが空洞内には照明がついているらしく、外の様子が次第に明るみになる。

内部には線路のようなレールがどこまでも敷かれていた。さらに奥へ機体が低空飛行で突き進むとガラクタを積んだ荷台列車とすれ違ふ。

恐らく防空シティーで発生した廃棄物をここまで運んできたのだろう。運転している人間の姿は一切見えない。自動操作で制御しているのだ。

誰もいない不気味な闇に紛れ込んだ気がしてマヒルは不安になって聞いた。

「ねえ、どこまでこの空洞は続くの？」

「この空間は防空シティーの分厚い外壁をくり抜いて作られた場所ですから、全長はさほどありません。もうすぐ最後の関門です」

案内からモニターに視線を戻したマヒルが見た物は大規模な発射装置だった。旧時代、宇宙空間へ人間がシャトルを飛ばしたと聞か、まさにその仕組みと酷似していた。

「ここまで運んできた廃棄物を大量生産した専用の無人シャトルに詰め込んで外界へ定期的に発射しているのです。今は運良く作業用の機械体はいないようです」

発射装置の周辺に点在している無人シャトルは細長い筒のような形状だ。旧時代のミサイルという兵器に似ている気がする。ただ無差別に撃ち込むだけに存在するみたいだな。

小型シールドボックスは発射装置の打ち上げ滑走路に沿うようぐんぐん高度を上げる。だがその先は――

「ちょっと、行き止まりじゃない！ 発射口が完全に閉じているわ！」

「外気がなるべく流れ込んでこないよう、廃棄物を詰めたシャトルを発射する時だけ開く仕組みになっています」

「暢気に説明しないでよ、ぶつかるわ！」

「心配いりません。開閉コードは事前にあなたの母親が私に与えてくれています。私が通過すれば赤外線でこちらが開閉口へと送った情報を読み取って自動的に――」

激突を恐れてマヒルが身をすくめた刹那、自動ドアが開くように視界が一気に開けた。

今度は辺り一面が闇に染まる。完全なる静寂。防空シティー内の領域なら人工天体システムの管理によって晴れているはずだ。それならばここはまさか――

「外界へ出ました。こちらはどうかやがて日が沈んだ時間帯のようです。」

何も見えませんので動力源を節約するためにモニターの映像を切ります」

「残念だけど、分かったわ」

暗くても念願の外界を直で見たかったマヒルだったが、いきなり動力切れを起こしても非常に困るので我慢した。それよりもついに外の世界へ旅立てた開放感がマヒルの心に満ちていた。長年の夢が今実現したのだ。

内心で喜びに浸っているマヒルに小型シュートボックスのAIがこれからの注意を促す。

『無事に着陸して外に出る際には危険ですので、必ず操縦席の収納ボックスにあるマスク型の防塵フィルターを必ず着用してください。それからパネル上にある搭乗ゲートの手動開閉キーを押して外へ。理由はご存じですね？』

「ええ、大体は。外界は感染型光化学粒子が蔓延していて、私たち優性因子ゲノムは直接呼吸できないのでしょ？」

『その理解で概ね正しいです。優性因子ゲノムが直接、感染型光化学粒子を体内に取り込むとあらゆる変調をきたす恐れがあります』

マヒルはずっと気になっていたことをこのAIに聞きたくなった。

「ねえ、一体、何が原因で外界は感染型光化学粒子に晒されるようになったの？ 普通の光化学粒子なら旧時代にもある程度、空気中に混じっていたと文献で見たわ。それにどうして私たち人間が優性因子ゲノムと劣性因子ゲノムに派生してしまったのよ？」

『私にはその問いにお答えする権限はありません。ただそうあなたが質問した場合に、ヒイロ主任研究員からのメッセージを預かっています。——自分の目で確かめなさい、だそうです』

意外な返答にマヒルが驚きつつも、融通のきかないAIに不満を抱く。

「お母さんがそんなことを？ でもちよつとは教えてくれたつていいじゃない？ 私たちこれから一緒に下界を探索するんだから」

『残念ながらそれは不可能です。着陸したら私はすぐに機能停止に

陥るでしょう。あらかじめそうプログラムされていますから」

予想もしなかった事実を告げられマヒルは困惑する。体一つで見知らぬ土地へ出て行くのは正直な話、怖くて嫌だった。

「どうして？ 私だけじゃ、何もできないのに……」

『当初からヒイロ研究主任は誰にも知られないよう、極秘裏にあなたを救うべく私を一人きりで作り上げました。湖に私を沈めて隠したのはそのためです。従って私には最低限の燃料しか積んでいません。今はまだ無駄にはできないとヒイロ研究員が判断した結果です。今はまだ無駄にはできない？ どういう意味なのかマヒルが呑み込めずにいるとAIは言葉を続ける。

『それにあなたには長年の相棒がちゃんというはずです、マヒルさん』

指摘されて自分の懐ですでに睡眠モードに入りつつある対話用ドールをマヒルは見つめた。はつきり言って頼りない。

マヒルの視線が体内のセンサーに反応したのか、イブは微睡みながらマヒルに話しかける。

『大丈夫よ、マヒルが変な場所で寝落ちしてヘンタイにゴウカンされないように私が見張っているから』

「今のあなたにだけは言われたくないわよ！」

仮にも対話用ドールなのに持ち主と感情を共有せず、気ままにしゃべるイブを呆れ顔で睨むマヒルに小型シユートボックスのAIが告げた。

『着陸まであと数分です。衝撃に備えて下さい』

モニター画像は消えて分からないがきつと大地どこまでも広がっているはずだ。全身に溢れる希望を胸にマヒルが肝心なことを案内人のAIに問う。

「どこに着陸する予定なの？」

『かつてトウキョウ23クと呼ばれていた地域です。ヒイロ研究主任が選定しました。それ以上の情報は残念ながら、私には与えられていません』

「いいわ。自分で確かめるから」

マヒルは着地に伴う振動で舌を噛まないよう口を紡ぎ、ゆっくりと
瞼を閉じる。

するとAⅠが残した最後の言葉が脳裏に焼付いた。

『着地点を確保。これにて交信を終了し待機モードに入ります。最後にヒイロ主任研究員からマヒルさんにメッセージを預かってい
ますので再生します。――マヒル、あなたには無限の可能性がある。以
上です』

直後、揺り返しの重力がマヒルを襲った――

一章 雛鳥、外界へ舞い降りて その2（前書き）

意外と早く一章の続きをアップ出来ました。ただこの先は時間がかかりそうなのでしばらく待って頂けると有り難いです。

また、感想なんかも下さるとなお嬉しいです。

一章 雛鳥、外界へ舞い降りて その2

濁りきった大気のせいで、月を拝めた経験は外界に捨てられてから一度もない。赤外線機能搭載のゴーグルを通して夜空を見上げながらソウゴは小さく溜息をつく。

どこまで見渡しても地上を圧迫するように漂う感染型光化学粒子を含んだ黒煙のせいで、昼と夜の区別もつかないのだからいつ月が現れるのかさえはつきりしない。だが腕時計を覗けばもう時刻をとくに過ぎたのは確かだ。

感染型光化学粒子さえなければ、外出するだけでこんなにも暑苦しい物を身につけずに済んでいたであろう。ソウゴは型落ちしたガスマスクの装着具合を手で確かめるよう恨めし気に撫でる。

いや、元をたどれば優性因子ゲノムである自分が、外界で暮らしているのだから不便なのだと愚痴ってみる。穢れなき遺伝子を持つとされている優性の個体は、この劣悪な環境においては逆に上手く適応できず足かせになるにすぎない。何とも皮肉な運命だ。

そう思うと同居人から短めに刈りこんでもらったこの黒髪も疎ましく思えてくる。旧時代からこの地域における伝統的な血縁では、髪も瞳の色も漆黒だったらしい。ただあの忌まわしいグラウンド・ゼロ以降、劣性遺伝子に変換してしまった人間の大部分が漆黒を失い、あらゆる身体の変色をきたしてしまっただ。

したがって外界において漆黒は憧れの象徴として見られている。純粋な血縁として。それでもソウゴ自身は嫌っていた。外で自由に空気も直に吸えないのだから、純粋な血縁など少しの役にも立ちはないからだ。

だが今は己の出生を呪っている暇などない。
ソウゴは携帯タイプのレーザー観測器（ジャンク品店でかなり高額

だった）を睨みながら自分が暮らす雑居街から東へはずれた地点をひた走る。

つい先ほど強い電磁波を観測器がとらえていた。獲物探しに出かけてから、こんなにも早く大きな反応が起きるなど思いもしなかった。もしかしたら防空シティーの連中がうち捨てた（実際には打ち上げた）簡易シャトル―宝箱の中身は貴重なオーバーテクノロジーかもしれない。

この地上では頻繁に用済みとなったあらゆる物資が、防空シティーから簡易シャトルで投棄されそのまま落下してくる。こういった物の多くはあらゆる分野で技術力の劣った外界において貴重品として扱われ、オーバーテクノロジーと呼ばれている。そうして一部は研究対象に、あとは売買されるケースがほとんどだ。

ソウゴも例にもれず廃棄された簡易シャトルからオーバーテクノロジーを掘り出してさらに使えそうなパーツに分解し、業者へ売りさばくことで生計を立てている。

よってレーザー観測器が受信した今回のチャンスを逃したくはなかった。幸いなことに競争相手――同業者の影はないからだ。

感染型光化学粒子の影響で腐敗し切った土壌を強く蹴り上げながら、レーザーの行方を頼りに進む。このまま行けば雑居街から少し外れて、旧時代に栄えた廃棄物処理場に辿りつく。

自然分解できない科学製品（朽ち果てたガラクタ）が山積みになっている広大な更地だ。

なるべくなら足を踏み入れたくないソウゴだったが、貴重品を釣り上げるためには仕方がないと思い直す。それに成果なしで帰宅すれば同居人に何て嫌味を言われるか分かったものでない。

ソウゴが頭上を再確認した直後、向かっている先に追い抜かれるような何かが地面へ直進していく。黒煙のせいではつきりは分からない。視認するためゴーグルの赤外線機能を働かせても輪郭をとらえるのがやっとだった。

滑らかな球状のボディ。あれは人工的な造形だ。もしかしたら

簡易シャトルどころではなく何からの実験機体なのかもしれない。もしそうならば貴重度は格段に跳ね上がるだろう。ソウゴはパーツの換金学を頭ではじき出しながら胸を躍らせて廃棄物処理場へ一目散に駆け出した。

小型シユートボックスが着陸した瞬間に発生した縦揺れは、マヒルが警戒していたほどひどくはなかった。恐らく衝撃緩和装置が正常に働いたためだろう。

マヒルは操縦席に縛り付けられた拘束具を手早く解くと、小型シユートボックスのＡＩが残してくれた忠告を守って防塵マスクで口と鼻を覆う。呼吸する分には違和感がないのがあった。

モニターの映像どころか照明も消え、すっかり静まり返ってしまったコクピット内部をマヒルは軽く見渡す。未練に駆られてもう一度ＡＩを呼び出そうとしたがやめた。

機能が停止するようにプログラムされていたということは、すぐに機体から立ち去りなさいという母の意図があるように感じられたからだ。マヒルは深呼吸して気持ちを落ち着かせるとＡＩから指南されたパネル上の開閉キーに手をかざしにかかる。高まる緊張感。だが――

『ビビっていないで、早く外に出ようよ、マヒル』

「……うるさいわね。興奮しているだけよ」

「ハツジョウしているの？」

「……な訳ないでしょう」

普段この対話用ドールと自分がどんな会話をしているのか懷疑的になりながら、マヒルはムードを壊されたように開閉キーに触れた。すぐに壁面のゲートが滑らかに開き、マヒルがイブを伴い体を屈

めながら搭乗口を抜ければ復元力が働くように再び自動で内部が密閉された。事実上、退路を断たれてしまったマヒルは地上に降り立ち頭を上げる。

そこでようやくずっと憧れを抱いてきた下界を拝むことができた。だが期待はすぐさま失望に変わりやがて深い悲しみがマヒルの胸に押し寄せてくる。

どす黒く混濁し切った空気からはマスクを通しても強烈な異臭を感じ、化学反応で原型をとどめていないほど溶解した産製品がこちら一帯にうず高く積まれている。

マヒルは足元に視線を落とす。何よりも見たかった大地は腐敗が進み、痩せ細ってしまっている。豊かな樹木や麗しい花どころか雑草一つさえ生えていない。全てが死んでしまっている。旧時代の書物や文献からあまりにもかけ離れた現実を目の当たりにして、マヒルは当惑を隠しきれなかった。

『何だか寂しい場所』

「そうね……」

イブの囁きに冴えない声で答えるマヒル。

一体、ここで何があったのだろうか？

物思いに沈んでいるとイブが小さな身体を震わせた。

『マヒル、誰か来る。それも大勢』

その言葉通り、背後から忍び寄ってくる一団の気配をマヒルは感じる。完全に不意を突かれた。マヒルが遅れて意識を向ける。だがすでに時は遅く黒を基調とした迷彩柄の戦闘服を着た男たちがマヒルのいる地点を見定めてすでに接近してきていた。

どの人間もまだ若く、マスク類は身に着けていない。髪や瞳の色合いもバラバラでマヒルは相手が劣性因子ゲノムであることを悟る。その粗野な風貌は旧時代の物語で読んだ野盗の姿と重なる。

マヒルが緊張のあまり膠着していると、一団の一人―くすんだ金髪を靡かせた男が奇声を上げた。

「おい見ろよ、女だ。オーバーテクノロジーの反応を辿って、こん

な薄気味悪い所まで来たかいがあつたぜ。なあ好きにしていいだろ
う？ 首領」

粘着質な視線を向けられ、身の危険を感じたマヒルは一步後退する。だが首領と呼ばれた長身の男が小型シュートボックスを指差し冷静に口を挟む。

「それよりもそこに転がっているオーバーテクノロジーの吟味が先だ」

母が設計した大切な機体を値踏みするかのように見られて、マヒルは黙っていられずに両腕を広げ立ちはだかった。

「この機体に汚い手で触れないでくれる？」

勇気を出して威嚇するマヒルを金髪男が再び凝視する。

「なあ、こいつ見たことない型だが防塵マスクしているぜ。髪も漆黒だ。優性に違いねえよ！」

「何だと？」

首領の男もマヒルに食いつく。途端に男たちの態度が急変した。興奮したように金髪男が卑下な笑みを剥き出しにしながら続ける。

「オーバーテクノロジーよりこの女を売った方が金になりますよ、首領。持ち帰ってもいいですよね？ 俺、優性の女なんて初めてなんですよ」

首領と呼ばれた男は一言で言えば冷酷だった。長身で丸刈りの頭にシャープな顔立ち。厳しい視線をマヒルに投げかける。マヒルは心の中で否定して！ と願った。そうしなければ小型シュートボックス内でイブが予言した通りになる。しかし――

「……好きにしろ。その代わり俺たちがオーバーテクノロジーを解体するまで、お前がちゃんと面倒を見るんだ」

「了解しました。へへっ」

首領に促され、金髪男が下賤な笑みを湛えながらマヒルの腕を取る。力任せに引き寄せられてから、お気に入り黒髪をいやらしい手つきで撫でられたのが我慢の限界だった。マヒルは悲鳴を上げる「やめてっ、この変態！」「抵抗されると余計、興奮する性質でね」

金髪男が指先をマヒルの顎に這わせようとした瞬間、新たな声が響き渡る。

「その女から手を離すんだな、下種野郎」

マヒルが声のする方向へ顔をやれば廃品の山に登った少年が、銃口を向けながら威圧するようにこちらを見下ろしていた。

ゴーグルを付けていても分かる鋭い双眸。短め目に刈られた黒髪と、マスクまで装着していることから自分と同じ優性因子ゲノムなのだろうか。マヒルは推察する。

ぞんざいな相手の口調に対し金髪男が怒りにかられて叫び返す。

「偉そうにしゃがって、誰だよ？ てめえ！」

「お前たちと同業の者だよ」

「……そうかい。ならここで死ね」

旧式のオートマチック銃を懷から抜き放とうする金髪男。だが動作の途中でいきなり後方へ吹き飛ばされてしまふ。位置関係から山場にいるゴーグル男が放った銃撃に違いない。

だがマヒルにはその実弾が一切見えなかった。気絶したまま動かない金髪男を見て、部下の一人が何かに気づいたように首領に対し報告する。

「こいつ、オーバーテクノロジーの第二級品、エアークハンドガン圧縮銃を持つ回収屋ですよ。優性で孤立しているくせに、どこのグループに入ろうとしない変わり種で、俺たちの縄張りも何度か荒らされています」

圧縮銃という聞き覚えのある単語にマヒルは反応する。ゴーグル少年が構えている銃をよく観察すれば、確かに防空シティーの治安部隊に配備されている物と酷似していた。ただし型落ち品であろう。圧縮銃は名前の通り実弾を込める必要はなく、周りの空気を取り込んで圧縮し、塊として放つ構造になっている。殺傷能力は低いが、弾切れの心配がいない利便性がある武器として防空シティーでも知られていた。

首領がゴーグル少年の出方を慎重に見極めながら部下たちに命じる。

「女を先に連れていけ。コイツは俺が片付ける」

「交渉決裂だな」

ゴーグル少年は一言呟くと、予備動作なしに廃棄物の山から大きく跳躍する。そして完全に隙を突かれた一団のど真ん中へと見事に着地。少年の編み上げブーツが鳴る。

棒立ちになっっている部下二人の腹部にひじと膝を打ち込んで無力化にすると、ゴーグル少年はマヒルの手を取り、強引に歩かせようとする。

「早く着いてこい！」

「ちよつと、いきなり何なのよ!？」

マヒルの不平に耳もかさずゴーグル少年は圧縮銃で威嚇し一団の陣形を乱しながら突破を図る。そのペースに巻き込まれながらマヒルは弾む息を押し殺す。

さらに振り返ると仲間を倒され、完全に逆上した残りのメンバーがなおもこちらを追走してくる。禍々しく積み重なったゴミだらけの荒地を得体のしれない少年に手を引かれ駆け抜けるマヒル。

一段と高い廃棄物の山を影にして一団の追手をやり過ごすべく、ようやく立ち止まったゴーグル少年の手をマヒルは無理やり払った。これ以上、知らない相手に対し黙って従う状況に嫌気がさしたのだ。「あのねえ、一体、私をどうするつもりよ？ あの連中みたいに、イヤラシイこと企んでいるんじゃないでしょうね!？」

「いいから黙っている。奴らに捕まったらお前はそれどころじゃ済まなくなる。俺はそういう未来を丸ごと失った優性の女をくさるほど見てきた」

相変わらず不遜な態度にマヒルは怒りが募る。

「じゃあ、あなたは一体誰なのよ？ それにこんなところで何をしていたの？ 名前も素性も知らない相手に従えられるわけないじゃない」

マヒルの正論にゴーグル少年はしばらく口を噤んだ。そしてゆっくりと息を吐き素性を説明する。

「……ソウゴだ。性はとうに忘れた。外界じゃ、名前しか用いないからな。この先にある雑居街に住んでいて、あの連中みたいにこの辺までオーバーテクノロジーを探しに来ていたんだよ。そうしたらお前が連中に絡まれていたってわけだ」

つまりこの少年も母が設計した物が目当てだったわけかとマヒルは警戒する。だが危ない所を助けてもらったのは事実なので、深く追求せずに礼を述べることにする。

「……そうなの。私はタカミヤマヒル。さっきはありがとう。それで追っかけて来る陰湿な人たちは何者なの？」

その返答でソウゴは初めて驚愕するように、瞳を見開きマヒルとともに顔を合わせた。真剣で真っ直ぐな眼差し。不覚にもマヒルは一瞬ドキツとする。

「……お前、まさか何も知らないのか？」

「当り前よ。さっき外界からやって来たんだから」

変に威張るマヒルにソウゴは深いため息をつく。

「何だよ、その旧時代に普及していたショウセツみたいな設定は？ 異世界からやって来たお姫様気取りかよ？ まったく、とんだ厄介者を拾ってしまったな…… あいつらは盗賊グループの構成員だ。」

ああやって集団規模でオーバーテクノロジーを根こそぎ持ち帰ったり、ひどい時には他人から奪ったりする。あとは若い女がいれば力づくで拉致してから、売春業者に高値で引き渡すなんてことも平気でやるんだよ。要は金になるとこは何でもする連中さ」

一気に捲し立てるソウゴの言葉をマヒルは噛み砕いて結論付ける。「つまり、あの人たちは妙齢で魅力ある私を売春婦にしようとしていたわけね」

「……いや、お前みたいな子供は普通、敬遠されるんだ。けど優性を好みとする金持ちからも需要があるから、奴らは高額になると踏んでお前をつけ狙っているんだよ」

ソウゴの指摘はピンポイントでマヒルの逆鱗に触れた。

「言っておきますけど、私こう見えてもうすぐ十六になるんですけ

ど」

氷点下の視線を向けられソウゴは驚く。

「えっ？　そうか。その体付きで……そりゃ悪かったな……」

ソウゴは主にマヒルのあまり発達しているとはいえない胸部を見ながら丁重に謝罪する。余計にブライトを傷つけられたマヒルがさらに文句を垂れようとしたら、ソウゴにいきなり手のひらでマスクの呼吸口を封じられた。

「静かにしろ。奴らの一人がこっちに近づいてくる」

もがくマヒルを押しとどめるようにソウゴは二人の体を死角へと隠す。

部下の一人が小銃を抱えながら巡回する足取りでこちらに歩いてくる。敵が離れようとしないのでソウゴは退路を確保するべく、クズ山から捨てられた何かの小型部品を手につけた。そうして雑居街とは反対になる廃棄場のさらなる奥地へと投げつける。

「そっちなか？」

物音を察知した敵がソウゴの策に引つ掛かりこちらから勢いよく遠ざかって行った。マヒルは感心するようにソウゴを褒める。

「あなた、悪知恵は働くようね」

「……ほつといてくれ。それよりも今の内に雑居街の方へ急ぐぞ。そこなら人通りもあって、奴らも無理に手出しはできないからな」

「……分かった、とりあえずあなたに着いて行くわ」

マヒルはソウゴの導かれながら先ほどの男とは逆方向へ駆ける。大地を蹴ることで腐敗の影響から土が砂塵のように舞い上がり、保温スーツに付着するのもお構いなしだ。女としてあるまじき荒んだ姿だ。だがひたすら走る。

しばらく進むと廃棄物の塊が減っていき、視界が開けてくる。ついに薄汚れた鉄筋コンクリート製のビル群が遠目からでも確認できた。

「あれは旧時代にマンションと呼ばれた住居よね？　今はどうなっているの？」

マヒルが興味にかられて尋ねてみれば、ソウゴは気のない返事をする。

「今でも人が住んでいるさ。大概が富裕層だけだな。それより、これから雑居街に入るからもう走らなくていいぞ」

ソウゴの説明通り、更地の部分からひび割れたアスファルトへと連なる境界線がはつきりと見えてきた。マヒルはソウゴに合わせて速度を緩める。

いくらか安心してマヒルが息を吐いたまさにその時、行く手を阻むかのように一団の数名が先回りして集結していた。どこへ行ったのか長身で目立っていた首領の姿はなく、残党の部下三人だけだ。

「ここさえ押さえておけば、いずれ来るだろうとは思っていた。確かお前はここら一帯の雑居街を根城にしていたはずだからな」

部下の一人がソウゴを見据えて笑う。そのしつこさにマヒルが不安を抱く。ソウゴは圧縮銃をゆっくりとした動作で構えながら、マヒルに指示を出した。

「ここで大人しくしている」「うん……」

マヒルが少し離れた位置から見守る中、ソウゴと盗賊グループの残党たちはにじり寄りながら互いに出方を探る。

硬直状態がしばらくあり、先に仕掛けたのはソウゴだった。

圧縮銃を散弾しながら突っ込んでいき、三人の連携を妨害するよう分散させる。残党たちはバラバラになりながらもソウゴに詰め寄る。だがソウゴの方が数段速かった。一人に足払いを放ち地面に転がすと、上から確実に空気銃を撃ち気絶させる。

さらに背後から迫り殴りかかる男の拳を腕でさばいてからの強烈な上段蹴りを見舞わせる。カウンター気味に入り相手の側頭部を痛打。二人目が失神する。

息つく暇もなく仲間をやられ、逃げ腰になっている残り一人をソウゴは実弾を撃たせる間も与えず圧縮銃を連射しなぎ倒した。

予想外なソウゴの強さに面喰いながらも、敵が全ていなくなり胸を撫で下ろすマヒル。合流しようとした刹那——ソウゴが叫ぶ。

「あと一人残っている。逃げる！」

とつさにマヒルが後ろに体を向けると、太い腕が伸びてきてマヒルの細い首に巻きつく。盗賊グループの首領だった。マヒルは抵抗も出来ずに羽交い絞めにされる。ソウゴが足を踏み出すタイミングを牽制するように首領が言い放つ。

「動いたらこの女がどうなるか分かるな？」

「大事な売り物じゃないのかよ？」

「ああ、だから利用させてもらう。持っている物、全部置いてこの場から立ち去れば、無傷で見逃してやる。だが逆らえばこいつが苦しむ姿を餌にしてお前をなぶり殺す」

マヒルからはソウゴが逡巡しているように思えた。当然だ。会って間もない人間のために自ら犠牲を払うなんてよく考えれば馬鹿げている。黙って退けば、あの人は少なくとも助かるのだから。

マヒルはそう結論づけて叫んだ。

「私のことはもういいから逃げて！」

だがソウゴは無言で圧縮銃をまっすぐ向ける。首領は嘲笑うように返す。

「この女と心中する気か？ 行きずりで会っただけの女なんだろう？ 放っておけばいいものを馬鹿な奴だ……」

「本気で助ける気がなかったら、最初からここにはいない。俺は自分の意志でその厄介者を引き受けたんだ」

ソウゴの瞳が実直さに溢れているのをマヒルは直視した。ゴーグル越しからでも分かる。そして相手をまったく信じきっていなかったさっきまでの自分を恥じた。

自分は何も分かっていなかった。同時にマヒルはどうか状況を打開しなければと気持ちを奮い立たせる。

「ならば、まずはこいつのマスクを外してやる。恐らくかなり苦しむだろうな。優性同士なら分かるだろう？ 感染型光化学粒子が体内に入ったらまず呼吸困難になる。さらに一定以上吸い込むと神経がやられて死が待っている」

残酷な言葉を並び立てながら、首領の男はマヒルの口元に指を伸ばす。その無防備な手の甲を見定めてマヒルは直感する。やるなら今しかない。

マスクを外しにかかる手の甲をマヒルは思いっきり噛んだ。

「くそつ、この女！」

マヒルの得意技に首領は思わず腕の拘束を解く。その隙に乗じてマヒルは前のめりに地面へ体を投げ出した。生じた一瞬の間。ソウゴが棒立ちの相手に対し圧縮銃をぶち込むには十分だった。

「女だと油断したな。心中するのはお前一人だけになったようだ」
腹這いの体制でソウゴの吐いた嫌味を少し頼もしく聞きながら、マヒルは不意打ちを成功せるために払った代償へ手を伸ばす。

取り外され地に落ちた防塵マスク。なるべく息をしないように気を使ったが噛みつく際、わずかに感染型光化学粒子を吸い込んでしまっていた。

息苦しくて起き上がれない。

ソウゴはマヒルの容体に気づくと慌てて駆けつけてくる。上半身を抱きかかえられマヒルは何故か母を思い出した。

——ねえ、下界ってどんなところなの？

——とても寂しい所よ

「おいっ、しっかりしろ！　こんな所で気絶するんじゃない」

ソウゴの呼びかけが意識の片隅に残し、マヒルはある思いを胸にしながら眠るように瞼を閉じた。

——母さん、そんなことないよと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787y/>

終末のシミュラクル・パペット

2011年11月15日03時17分発行